

近代における仏教讃歌と伝道

白 金 昭 文

一

仏教讃歌、すなわち西洋音楽の手法による声楽を伴う仏教音楽は、明治期より今日まで数多く作られているが、資料的整理も十分でない。ここでは従来の研究では不明とされている¹⁾仏教音楽会の活動に若干触れ、資料的補填を果たしたい。

仏教音楽会は、明治39年8月に『仏教唱歌集』を刊行し、大正6年7月に増訂改版を『仏教唱歌集初篇』として上梓した。後者には仏教音楽会略史が二頁にわたって収載されている。いまこの略史と、前者の序文とによってみると仏教音楽会について次のようなことが知られる。

- (1) 明治35年8月16日より東京市浅草区山之宿町十九番地東光社において、仏教音楽を中心とした夏期講習会が開かれた。講師は東京音楽学校教授山田源一郎で、唱歌および器楽使用法を教授した。受講者は二十余名であった。
- (2) 8月29日に仏教音楽会の発会式を東光社において挙げ、趣意書を發表した。

(3) 趣意書の要点は、①従来の仏教唱歌はキリスト教讃美歌の模倣であつたり、在来の和讃に曲譜を付した類に過ぎなかつた。②西洋音楽の隆盛になりつつある今日では、時代思想に適合せる音楽を制定する要がある、の二点に集約される。

(4) 発会後は、原青民、梶宝順、来馬琢道の三名が幹事になり、毎月第一、第三日曜日に講習を続けた。

(5) 夏期講習会は明治39年まで毎年開催された。

(6) 仏教音楽会の所在地は最初は梶宝順の自坊に設置された東光社内であつたが、大正6年の時点では既に来馬琢道の自坊・万隆寺内（東京市浅草区新谷町十番地）に移つてゐる。

二

次に仏教音楽会刊行の『仏教唱歌集』の内容は次のようであつた。（歌題、作詞者、作曲者の順に示す）

1 「各宗祖の歌」 伝教大師・円光大師・承陽大師・見真大

師・日蓮上人・空也上人／（雅楽律旋） 2 「いろは」弘法大師 3 「生けらば念仏」円光大師 4 「超世の悲願」見真大師 5 「三帰」大内青巒／成瀬鉄治 6 「普回向」大内青巒／成瀬鉄治（5と同曲） ⑦「仏の心」赤尾白嶺／成瀬鉄治 ⑧「灌仏の曲」安藤弘／安藤弘 9 「卯月八日」赤尾白嶺／成瀬鉄治 10 「鶴の林」真野観堂／成瀬鉄治 ⑪「求道の歌」関屋竜吉／安藤弘 12 「罪あるわれら」暁鴉敏／成瀬鉄治 ⑬「仏の力」暁鴉敏／安藤弘 14 「よろこび」暁鴉敏／安藤弘 15 「三世」土岐善静／渡辺森蔵 16 「朝の歌」赤尾白嶺／安藤弘 17 「夜の歌」赤尾白嶺／安藤弘 18 「樂しき朝」千崎如幻／鈴木米次郎 ⑲「千年万年」赤尾白嶺／成瀬鉄治 20 「法の深山」土岐善静／成瀬鉄治 21 「法の月」吉川萩山／渡辺森蔵 22 「法の風」井上徳定／山田源一郎 23 「仏のみ子」井上徳定／山田源一郎 24 「魂まつり」赤尾白嶺／成瀬鉄治 ⑳「はちす」土岐善静／大村恕三郎 ㉔「法の雨」（忠魂追弔歌）真野観堂／本会撰曲 ㉕「つどへる友」千崎如幻／小出雷吉 28 「仏教婦人会の歌」真野観堂／本会撰曲 29 「常世の春」関屋竜吉／安藤弘 ③〇「勢至丸」赤尾白嶺／山田源一郎 ③①「御忌」真野観堂／渡辺森蔵

以上31曲のうち5と6とは同一のメロデーである。歌詞の体裁は、和歌1曲（六首）、七五調22曲、五七調2曲、七七

調3曲、その他3曲で、大多数は七五調である。曲調は雅楽律旋のもの1曲を除いては、初期の「小学唱歌集」の曲調と同様であり、伝統的仏教音楽の曲調は見られない。なお、楽譜は略譜（数字譜）である。

増訂改版である大正6年刊の『仏教唱歌集初篇』は、次の二点に改良がみられる。

(1) 本譜（五線譜）を採用した。したがって調名、拍子が記されている。しかし伴奏譜はない。

(2) 曲目の排列を、1礼讃、2仏、3法、4僧、5人事、6生活、7特殊の会合の歌、の順にした。

21曲が収載されており、新たに加えられた曲は、「伝教大師讃歌」修多羅亮延作歌／東儀哲三郎作曲、「樂しき園（少年教会の歌）」望月秋湖作歌／成瀬鉄治作曲の2曲である。

曲目の排列は、仏教讃歌の分類を試みた例として注目されるよう。

また、巻末には『仏教唱歌集第二篇』刊行予定の広告が載せてあり、20曲の曲名が記されている。しかし、第二篇が実際に刊行されたかについては不詳である。

三

明治35年に発足してから満四年を経た時点で30曲の新作仏教讃歌を刊行したのであるから、仏教音楽会の活動は活発であつたと云えよう。しかしながら、これら30曲の仏教讃歌は

現在では一曲も使用されていない。ここに仏教讃歌と伝道活動との問題点が存するのではなからうか。

小学唱歌は、小学校においては歌われたが、学校を一步出るとその多くは歌われなかつたといわれる。^③『仏教唱歌集』の曲調は小学唱歌集と同様である点からみれば、一般に歌われなかつたのも当然と思われる。曲調の性格に普及しない要素があつたと考えられる。

しかしまた、現在においても仏教讃歌は伝道活動の中心になり得ないでいる現状から考えるならば、普及しなかつた原因のすべてを仏教讃歌自体に帰せられない。当時における伝道活動の諸般の事情も考察されねばならない。

『仏教唱歌集』の刊行された当時の状況としては、(1)音楽を受けいれやすいのは児童であるが、児童対象の伝道集会は殆んどみられない、^④(2)仏教青年会は各地に結成される気運にあつたが、日常的な活動が継続していない、(3)中等教育を施す仏教主義の学校もあまり設立されていなかつた、など、実際には伝道活動の現場は少なかつた。

そればかりでなく、仏教讃歌と伝道活動との間には、より根本的な問題が介在している。それは、仏教讃歌は仏教の伝道において不可欠の要素であるとの認識が深められない伝道活動がなされていたということである。伝統的な伝道活動にあつては、声明や和讃などの仏教音楽と伝道とは密接にかか

わつていた。しかし近代における仏教の伝道は、儀礼と説教と仏教讃歌とを不可分のものとして統合しえない伝道活動であつた。これをキリスト教の場合にみるならば、讃美歌がなければ礼拝（儀礼）は成り立たないのである。仏教讃歌はキリスト教における讃美歌のごとき地位を確立できなかったと云える。

1 竹内淳有「明治時代の仏教音楽」、山崎昭見「仏教讃歌年譜」（昭55、仏教伝道協会）などでは、仏教音楽会の講習会を明治36年としている。

2 山住正己「日本の子どもの歌」（岩波新書）38頁。

3 日曜学校が普及しはじめるのは大正期になつてからである。

（足利短期大学講師）